

平成 30 年 8 月 31 日現在

機関番号：33906
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2013～2017
 課題番号：25370316
 研究課題名(和文) 詩論構築者としてのチャールズ・オルソン

研究課題名(英文) Charles Olson as a Poetics Maker

研究代表者

平野 順雄 (HIRANO, Yorio)

椋山女学園大学・人間関係学部・教授

研究者番号：00199085

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：詩論構築者としてのチャールズ・オルソンを描くために、三つの事を行なった。(1) オルソン著『ミュソロゴス』(1979)読解。13篇の講演、座談、インタビューから成る『ミュソロゴス』の一篇に対して一本の論文を当てて、解読を試みた。(2)オルソン著『わが名はイシュマエル メルヴィル研究』(1947)翻訳。オルソンにとってメルヴィルがどういう意味を持っていたのかを理解するために、翻訳作業を行い、詳しい註を作成した。(3)オルソン著『人間の宇宙』(1967)には、詩論として重要な論文が3篇ある。「人間の宇宙」、「投射詩論」、「等しいとは、現実と等しいこと」の3篇である。この論文化を行なった。

研究成果の概要(英文)：My aim of this study was to feature Charles Olson as a poetics maker. I tried to understand the three major essays by Olson. Muthologos: the Collected Lectures and Interviews (1979), Call Me Ishmael: A Study of Melville (1947), and Human Universe and Other Essays (1967). It was not easy to understand these books. I tried to explain each lecture, talk, and interview included in Muthologos. It requires patience and deep insight. I tried to translate Call Me Ishmael into Japanese with annotations. It requires precise knowledge of Shakespeare and all the works of Melville. It takes one or two years to make myself ready for critical annotations of this book. However, the translation of the text itself was done. I tried to elucidate the difficult passages in the three essays in Human Universe, that is, "Human Universe," "Projective Verse," and "Equal, That Is, to the Real Itself." The last of these requires knowledge about Non-Euclidean Geometry and the theory of relativity.

研究分野：アメリカ詩

キーワード：チャールズ・オルソン ブラック・マウンテン派 投射詩論 マクシマス詩篇 ロバート・クリーラー
 エドワード・ドーン ラリー・アイグナー

1. 研究開始当初の背景

(1)研究代表者の研究の出発点は、T. S. エリオット (T. S. Eliot, 1888-1965) であった。エリオットの詩と詩劇に現われる鍵イメージの読解を通じて作品解釈を行っていた。1980年代の後半にノースロップ・フライ『T. S. エリオット案内』(Northrop Frye, *T. S. Eliot: An Introduction*, 1963)及びJ・ヒリス・ミラー『現実を歌う詩人たち 6人の20世紀作家』(J. Hillis Miller, *Poets of Reality: Six Twentieth-Century Writers*, 1965)を読んで、衝撃を受け、深く反省させられた。

私が理解できずにいたエリオットの作品中のイメージや観念は、既にミラーとフライの手によって解明されていたのである。それまでの研究態度を反省した結果、私は研究対象をエリオットと同時代のエズラ・パウンド (Ezra Pound, 1885-1972)に移し、次いで、反エリオットの旗頭であったチャールズ・オルソンに移した。

(2)エリオットからオルソンへ移行する途中で、パウンドの長編詩『詩篇』(*The Cantos*, 1969)を論じた。この頃から、私は20世紀アメリカ長篇詩に興味を持つようになった。オルソンへの興味から、直ちに長編詩『マクシマス詩篇』(*The Maximus Poems*, 1983)読解に向かったのは、このためである。

2012年2月に『マクシマス詩篇』完訳を出版することができた。翻訳に当たって依拠したのは、ジョージ・F・バタリック『マクシマス詩篇案内』(George F. Butterick, *A Guide to the Maximus Poems of Charles Olson*, 1978)及びロバート・クリーリー編『チャールズ・オルソン選集』(Robert Creeley ed. *Selected Writings of Charles Olson*, 1966)である。

(3)しかし、オルソンの詩論『ミュソロゴス』(*Muthologos*, 1979)、メルヴィル論『わが名はイシュマエル』(*Call Me Ishmael*, 1947)、評論『人間の宇宙』(*Human Universe*, 1967)は、『マクシマス詩篇案内』に、参照せよと記してあったにもかかわらず、参考にすることができなかった。その理由は、これらの書物自体が難解かつ濃密なテキストで研究に値するものだったからである。

こうした書物を書く詩論構築者としてのオルソンを『マクシマス詩篇』と関連させて正確に把握できれば、ビート作家やニューヨーク派詩人の影になっていたため重要性が認識されにくかった詩人オルソンの姿を浮き彫りにできる。オルソンの詩論構築を正面から論ずることによって、モダニズムからポストモダニズムへ、次いで言語詩とその先へと急速に潮流が変化していった20世紀アメリカ詩史を見直す契機が生まれると考えた。

(4)チャールズ・オルソンに関する著作は、以下の三種類に大別できる。トム・クラーク『チャールズ・オルソン 詩人の生涯の寓喩』(Tom Clark, *Charles Olson: The Allegory of a Poet's Life*, 1991)やチャール

ズ・ボア『コネティカットのチャールズ・オルソン』(Charles Boer, *Charles Olson in Connecticut*, 1975)を筆頭にオルソンという人物に焦点を当てたもの。ジョージ・F・バタリック『マクシマス詩篇案内』(1978)、ドン・バード『チャールズ・オルソンの「マクシマス」』(Don Byrd, *Charles Olson's Maximus*, 1980)など、オルソンの大作『マクシマス詩篇』読解に焦点を当てたもの。アメリカン・ルネサンスから現在までの詩史の中で、オルソンの作品が持つ意味を捉えようとするスティーヴン・フレッドマン『アメリカ詩の基礎作り オルソンとエマーソンの伝統』(Stephen Fredman, *The Grounding of American Poetry: Charles Olson and the Emersonian Tradition*, 1993)や、パウンド伝統の中にオルソンを位置づけようとするクリストファー・ビーチ『影響のABC エズラ・パウンドとアメリカ詩革新の伝統』(Christopher Beach, *ABC of Influence: Ezra Pound and the Remaking of American Poetic Tradition*, 1992)などは、オルソンに相応しい遠近法を設定し、その中に詩人を入れて理解しようとする真摯な試みである。

(5)しかし、オルソンの詩論を正面から取り上げた研究書は少ない。わずかにロバート・フォン・ホールバーグ『チャールズ・オルソン 学者の芸術』(Robert von Hallberg, *Charles Olson: Scholar's Art*, 1978)が挙げられる程度であった。

2. 研究の目的

本研究の全体構想は、詩論の構築者としてのオルソンを捉えることである。そのために具体的な目的を、以下の4点とする。

(1)講演、座談、インタビューよりなるオルソンの詩論『ミュソロゴス』を読解し、これを論文化する。

(2)オルソンのメルヴィル論『わが名はイシュマエル』を翻訳し、詳しい註を施す。

(3)評論『人間の宇宙』に含まれる重要な詩論を読解し、論文化する。

(4)上記のオルソンの著作について論文を作成する際には、日本語論文だけでなく、必要に応じて英語論文を作成する。また、上記3作品の(1)『ミュソロゴス及び(3)『人間の宇宙』については、オルソンの詩論に的を絞った研究書の可能性を探る。(2)『わが名はイシュマエル』については、注釈付き翻訳書出版の可能性を探る。

3. 研究の方法

具体的な方法は次の4点である。

(1)オルソンの詩論を読解し、その一つ一つを論文化することにより、詩論構築者としてのオルソンの姿を浮かび上がらせる。対象とするのは、『ミュソロゴス』の全ての章、『人間の宇宙』では詩論として重要な章を、読解する。

(2)メルヴィル論『わが名はイシュマエル』

を翻訳し、詳しい注解を施す。

- (3) 上記の詩論読解と翻訳に『マクシマス詩篇』本文を対照させる。詩作と詩論の関連を考察し、その結果を論文化する。必要に応じて英語論文を書く。
- (4) オルソン関連の資料を多く持つ国外の図書館へ行き、資料を収集する。カリフォルニア大学バークリー校図書館、コネティカット大学附属トマス・ドッド研究所、カナダのサイモン・フレイザー大学図書館などへ出張する。また、『マクシマス詩篇』の舞台となったマサチューセッツ州グロスターを訪れる予定である。

4. 研究成果

(1) オルソンの詩論読解

『ミュソロゴス』及び『人間の宇宙』で展開されている詩論の核心部にあるものは何かを究明した。

『ミュソロゴス』は、講演、座談、インタビューから成るテキストである。それぞれに1章が当てられている。バタリック編『ミュソロゴス』(George F. Butterick ed, *Muthologos*, 1979)は、全体が13章立てである。ラルフ・モード編の改訂版『ミュソロゴス』(Ralph Maud ed., *Muthologos*, 2010)は、16章立てになっている。本研究ではバタリック編を底本とし、必要に応じてモード編を参照する。

以下、講演、座談、インタビューの順に読解した成果を記すこととする。

<講演>

講演には「歴史について」, 「気軽な神話学」, 「バークリーでの朗読」, 「コートランドでの講演」, 「詩と真実」, 「ブラック・マウンテンについて」の6章がある。

その中で「歴史について」, 「コートランドでの講演」, 「詩と真実」が重要である。それぞれに要点を述べる。

i. 「歴史について」は、ブリティッシュ・コロンビア大学で開催されたシンポジウム(1963年7月)の録音を文字に起こしたものである。オルソンが加わったシンポジウムのパネリストは、ロバート・クリーリー、ロバート・ダンカン(Robert Duncan)、アレン・ギンズバーグ(Allen Ginsberg)、フィリップ・ホエーレン(Philip Whalen)で、すべて詩人である。

「歴史」とは何かを考え抜いて、シンポジウムで読むための詩「場所、そして名前」(“Place; & Names”)を携えてパネリストとなったオルソンは、一貫してシンポジウムをリードした。極めて難解で密度の濃い詩であるため、その場で「場所、そして名前」を理解できる者は少なかったのではないと思われる。「歴史」は宇宙的次元と身体的次元で捉えられており、物語や、人や場所とどのような関係にあるかが提示される。

ウパニシャッドの「馬を犠牲に捧げる者たちが行く場所」が思考の鍵として提示されるが、その解釈には相当に骨が折れる。オルソンは話を単純化して分かりやすくするのではなく、個別に、ますます詳しく、精密に述べる人物なので、理解できるところを理解しておき、理解できないところは、自分なりの研究をしたのちに、再び読み返すという手続きをとるほかない。

意味深いと思われたのは次の2か所である。われわれの誰もが複製で、ありきたりの者であるが、特殊性を有しているという逆説。複製はオリジナルではないが、複製と複製の間には違いがある、という箇所。もう一か所は、次元の低いものを扱う場合でも、人間の根源的体験が高い次元となる可能性を捨てることはない、という箇所である。

ii. 「コートランドでの講演」は、ニューヨーク州立大学コートランド・カレッジで行なった講演(1967年10月)の紹介である。最近、自己を主張する(affect)詩が出てきたことを指摘し、ブラック・マウンテン大学でオルソンの教え子であった二人の詩人に言及する。

一人は、講演会場にいるジョン・ウィーナーズであり、もう一人は音楽バンドを率い、反体制的な名前の出版社を持つ詩人エド・サンダーズである。

講演の中でオルソンは、サンダーズには厳しく、ウィーナーズには暖かい評価を下したが、オルソンは自分の詩も聴衆の評価という試練を受けるべだと考え、自作の詩の朗読を開始する。自分が評価する側に立っているという考え方が既に自分が畏にはまっている証左だと気づいたのである。

iii. 「詩と真実」は、『ミュソロゴス』中の詩論で最も重要なものの一つである。ミュトスは虚構で、ロゴスが真実だとする通常の考え方に対して、ロゴスもミュトスも共に「語られていること」を意味するという洞察が示される。

オルソンは『マクシマス詩篇』の中では、ヘロドトスをミュソロゴスと呼んでいたが、これを改める。ホメロスはミュソロゴスだが、ヘロドトスはロゴグラファーだと訂正するのである。

こうした訂正を『マクシマス詩篇』執筆中に行なうところが、特徴的である。こうした事実は、長編詩『マクシマス詩篇』の全体がプロセスの中にあることの証左である。

<座談>

座談は「マッシュルームの下で」, 「チャールズ・オルソンとエドワード・ドーン」, 「ハーバート・A・ケニーとの対談」, 「グロスターのオルソン、1966年」の4章である。

i. 「マッシュルームの下で」は、1963年にグラトウィック夫妻宅で行なわれた座談会の録音を文字起こしたものである。

W. C. ウィリアムズを始め、作家たちと親しい夫妻は、自宅で文化的な集まりを行なうのが常である。

この時は、オルソン夫妻を招き、薬物研究者ティモシー・リアリーの実験についてオルソンから話を聞いたものである。マッシュルームと呼ばれる幻覚剤シロシピンを服用した効果をオルソンに尋ねるのだが、グラトウィック氏の一行は誰一人として自分で実験してみようとはしない。他人の体験を聞き、自らの経験にしようとするのみである。

オルソンが、実際に試してみなければ何も分からないと再三説いても、グラトウィック氏の一行は、他人の体験を聞き、自らの意見を述べるばかりである。

世界認識には動機が肝心であるというメルロ＝ポンティの主張を引き合いに出して、辛抱強く語り掛けるところに、『マクシマス詩篇』の書き手オルソンと、語り掛ける人オルソンの共通点が見出せる。

ii. 「チャールズ・オルソンとエドワード・ドーン」は、パークリー詩人会議(1965)の合間にオルソンが愛弟子ドーンを勇気づける様子を描く。二人の間では、本当の詩についての深い議論も行なわれる。

iii. 「グロスターのオルソン、1966年」は、「図書館員」(“The Librarian”)という詩を含んでいる。この詩を、悪が封じ込められた詩と読むことができる。「図書館員」は商業主義や資本主義との闘いを鮮明に打ち出した『マクシマス詩篇』の足元を崩しかねない危険な詩である。

『マクシマス詩篇』に登場する英雄の一人、ルイス・ダグラス老人の訪問によって、オルソンは「図書館員」の闇から救い出される。「グロスターのオルソン、1966年」の核心には、楽園からの追放と赦しがある。

iv. 「ハーバート・A・ケニーとの対談」は、『ミュソロゴス』の最終章である。対談によって、露になったのは、アメリカの始源が息づく「都市」(polis)グロスターと資本主義体制下にある現在の都市(a city)グロスターとの乖離である。

理想の「都市」から大きく隔たり、資本主義に蹂躪された現在のグロスターに、今なお「都市」が息づいていることを、オルソンとケニーは語った。しかし、「都市」の理想を語った二人は、その下部構造を支える女たちの苦しみに終わりが無いことを、自分の事として理解したのである。

「都市」グロスターとその問題は、読者にも確実に伝わったはずである。

<インタビュー>

インタビューは「BBCのインタビュー」
「1968年8月、グロスターでのインタビュー」
『パリ・レヴュー』のインタビュー」の3章である。それぞれに、内容を簡潔に記す。

i. 「BBCのインタビュー」では、オルソン

の詩の本質は何かをインタヴューが尋ね、それに対して、オルソンが「最も深い詩の原理は、自分の存在の意味を探ることだ」と答えている。

ii. 「1968年8月、グロスターでのインタビュー」は、メルヴィル論に感銘を受けた女性が、オルソン宅を訪れた際の会見記録である。話題は多岐にわたるが、エスキモーがアザラシ漁をする方法や、サムタル(samtal: ともに回転する事)の概念が、『わが名はイシュマエル』を読み解く鍵でありエイゼンシュテインの映像実験に通じると述べている点は興味深い。

iii. 『パリ・レヴュー』のインタビュー」は特異である。『パリ・レヴュー』から派遣された聞き手、ジェラード・マランガ(Gerard Malanga)がオルソンに行ったインタビューは、実りある話の一つとして成立しないまま終わるからである。インタビューは、空回りするのである。

詩人で写真家のマランガは、オルソンとの会見内容を実際の4分の1に切り詰めて発表し、それが『パリ・レヴュー』のオルソン会見記となる。『パリ・レヴュー』は、マランガの編集によって、空回りする印象のない、口当たりの良いものになっている。ただし、マランガが削除した会見内容は、全体の4分の3に当たるのである。

マランガが削除した箇所は、多くの場合、聞き手マランガの不適切な問いに対してオルソンが誠心誠意回答するのであるが、その回答をマランガが受け止めきれず、インタビューが空回りする箇所である。

そのような箇所は、アメリカ合衆国の抱える課題や、詩の動向といった主題についてオルソンが意味深い回答をすればするほど、聞き手が回答の意味を理解できない結果生じる会話の流れの空白である。普通にはない、空白が前景化されている点で、特異なインタビューなのである。

『人間の宇宙』は、17の評論と8本の書評から成る。そのうち、詩論として重要なものは「人間の宇宙」
「投射詩論」
「等しいとは、現実そのものと等しいこと」の3本である。

i. 「人間の宇宙」は、評論集『人間の宇宙』の巻頭論文である。ギリシャ的な思考法すなわち、ロゴス中心主義の思考法に対する批判から始まり、ロゴス中心主義によって失われてしまう経験をどう奪回するかに焦点が絞られていく。

その後、唐突にマヤの神話が紹介されて、突然論文は終わる。この最後の点をどう解釈できるかが、本論の中心になった。

ロゴス批判で始めた論文は、西欧の論理とは異なるマヤの神話で閉じられることによって批判が徹底すると解釈できる。また、マヤ族の神話に見られる「熱い」生き方は、エネルギーの伝達を旨とする「投射詩論」と響き合うことが分かった。

ii. 「投射詩論」については、日本語に翻訳する作業を通じて、詩論を精密に理解しようと務めた。原文を厳密に理解するにはこの作業が有益だった。その理由は、理解が及ばない箇所と理解できる箇所が、翻訳作業によって明らかになったからである。

「投射詩論」は、「知の舞踏」というパウンドに由来する概念や、開かれた形式の称揚、息（プレス）の重要性などを含む画期的な詩論である。1950年発表という点も、20世紀初頭のモダニズムからの時間的隔たりを思わせる。

興味深い点が3つある。詩行の法則の定義と説明、「客体主義」(objectism)という考え方、投射詩の現在と未来に関する考察である。投射詩論への批評小史を書き加え、投射詩論の射程をどのように測ればよいか、手順を示してみた。

iii. 「等しいとは、現実そのものと等しいこと」については、テキストの全訳を行なったが、文学的文化的素養のみならず、非ユークリッド幾何学や相対性理論などについての基礎的理解が必要であることがわかった。

オルソンにとって数学や物理学がどのような意味を持ったのか、そうした科学が詩論とどのように関係するのかを考える端緒につくことができた。

(2) メルヴィル論『わが名はイシュマエル』には、メルヴィル研究を通して、アメリカの精神を問う視点が表現されており、研究の枠組みを超えて、全体がオルソンの詩論になっている。

メルヴィル研究の形で書かれたオルソンの深い思索と詩論を詳しい注釈の着いた翻訳の形で著わすことによって、19世紀作家メルヴィルと20世紀中葉の詩人オルソンの思索が切り結ぶ様子を明らかにしたい。

このように考えて『わが名はイシュマエル』翻訳に着手した。シェイクスピア演劇とメルヴィルの作品に精通していることを要求される翻訳なので、基礎的な準備が必要である。

コネティカット大学附属トマス・ドッド研究所で閲覧したオルソンの修士論文「散文作家にして詩的思索家、ハーマン・メルヴィルの成長」(“The Growth of Herman Melville, Prose Writer and Poetic Thinker,”1933)が

オルソンとメルヴィルを考えるうえで有益であった。

(3)オルソンの詩論と『マクシマス詩篇』を始めとするオルソン自身の作品を対照させる作業は、オルソンがすでに行っている。オルソンは講演の中で自作を引用しながら語るからである。『ミュソロゴス』でオルソンが引用した詩のタイトルを以下に記す。

i. 「気軽な神話学」では、a. 「カボット断層をまたぐ」(Maximus 404)、b. 「手紙、1959

年5月2日」(Maximus 150-56)、c. 「ウリクミの歌」(“The Song of Ullikummi”)、d. 「怒りで激昂するタルタロスの犬は」(Maximus 405-7)、e. 「七年たったらお前は」(Maximus 408-9)、f. 「吉報」(Maximus 124)、g. 「(ヨーク出身の)クリストファー・レヴィット船長」(Maximus 137-9)など7篇に及ぶ。

「気軽な神話学」は、神話学を樹立しようとする試みである。その場合、自らが知悉する詩を用いて行なうのが簡便である。オルソンは自分自身の詩を実例や根拠のように扱って論を進めるのだ。

ii. 「パークリーでの朗読」では自作の詩を朗読しながら講演を進める形式がとられている。『全詩集』と『マクシマス詩篇』から a. 「...の環」(Collected Poems 243)、b. 「キリスト降誕の頌歌」(Collected Poems 246-9)、c. 「手紙5」(Maximus 21-22)、d. 「マクシマスよりグロスターへ手紙2」(Maximus 9)、e. 「手紙9」(Maximus 47-48)、f. 「手紙10」(Maximus 49-51)、g. 「初めてファン・デ・ラ・コーサの眼で世界を見て」(Maximus 81-85)の7篇の詩を朗読している。

iii. 「グロスターのオルソン」では、「図書館員」(Collected Poems 412-414)が大きく取り上げられ、章の中心主題になっている。

iv. 「詩と真実」には、a. 「手紙23」(Maximus 104-5)、b. 「手紙15」(Maximus 72)、c. 「手紙16」(Maximus 76)。商業主義や初期の資本主義およびニューイングランド・マナーによって墮落していくアメリカの姿が、3篇の詩の引用によって、明確に伝わるよう工夫してある。

v. 「BBC インタビュー」には、「ザ・K」(Collected Poems 14)が引用されているだけである。

vi. 「ハーバート・A・ケニーとの対談」では、ニューイングランド・マナーを歌う a. 「手紙16」(Maximus 76)が再び引用され、b. グロスターから伝統を伝える館が消えることを嘆く「12月18日」(Maximus 597-99)、および c. 「移住の実際」(Maximus 479, 565)が引用されている。すべて、グロスターを考える際には必要な詩である。

vii. 「オルソンのコートランド講演」には、オルソンが、すべて『マクシマス詩篇』から選び出して朗読した詩が7篇ある。タイトルの後に頁数のみ記すと以下ようになる。

a. 「マクシマスよりグロスターへ、手紙27」(184-5)、b. 「尾根」(元来は「手紙28」として書かれた詩)、c. 「マクシマスより、グロスターにて、日曜日、65年」(449-50)、d. 「グロスターのマクシマス」(473)、e. 「我が家について」(504)、f. 「ジェネラル・スタークス号が航行不能に陥った冬」(480-81)、g. 「ゴソニックと呼ばれる芸術」(551-55)。

オルソンは、詩人としての自己の存在理由を、これらの詩の朗読に賭けたのである。

オルソンの詩論と『マクシマス詩篇』を始めとする詩作品は、緊密に結びついているこ

とが分かる。詩論と詩作は、ともに自分の存在の根底を確かめる行為なのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 12 件)

1) 平野順雄、「チャールズ・オルソン著『投射詩論』再考」(下)、椋山女学園大学、『椋山女学園大学研究論集』第 49 号、人文科学篇、2018 年 3 月、pp.137-171.

2) 平野順雄、「オルソンのコートランド講演 チャールズ・オルソン著『ミュソロゴス』読解」、『文学と評論』第 3 集・第 12 号、2017 年 11 月、pp. 36-52. <査読有>

3) 平野順雄、「等しいとは、現実そのものと等しいこと」について チャールズ・オルソン著『ミュソロゴス』読解」、『文学と評論』第 3 集・第 12 号、2017 年 3 月、椋山女学園大学人間関係学部、『人間関係学研究』第 15 号、pp. 57-63.

4) 平野順雄、「チャールズ・オルソン著『投射詩論』再考」(上)、『椋山女学園大学研究論集』第 48 号、人文科学篇、2017 年 3 月、pp. 79-87.

5) 平野順雄、「ロゴスと神話 チャールズ・オルソン「人間の宇宙」覚え書き」、『人間関係学研究』第 14 号、2016 年 3 月、pp. 35-48.

6) 平野順雄、「『都市』グロスターとその問題 チャールズ・オルソンとハーバート・A・ケニーの対談より」、『椋山女学園大学研究論集』第 47 号、人文科学篇、2016 年 3 月、pp. 43-62.

7) 平野順雄、「ブラック・マウンテン回顧録 チャールズ・オルソン著『ミュソロゴス』読解」、『人間関係学研究』第 13 号、2015 年 3 月、pp. 95-120.

8) 平野順雄、「チャールズ・オルソン著『ミュソロゴス』読解 『1968 年 8 月、グロスターでのインタビュー』」、『椋山女学園大学研究論集』第 46 号、人文科学篇、2015 年 3 月、pp. 69-85.

9) 平野順雄、「チャールズ・オルソン著『ミュソロゴス』読解 『パークリーでの朗読』」、『人間関係学研究』第 12 号、2014 年 3 月、pp. 63-92.

10) 平野順雄、「チャールズ・オルソン著『ミュソロゴス』読解 『気軽な神話学』について」、『椋山女学園大学研究論集』第 45 号、人文科学篇、2014 年 3 月、pp. 73-89.

11) 平野順雄、「師と教え子との対話 チャールズ・オルソン著『ミュソロゴス』読解」、『文学と評論』第 3 集・第 9 号、2013 年 11 月、pp. 23-47. <査読有>

12) 平野順雄、「『図書館員』における殺害と赦し チャールズ・オルソン著『ミュソロゴス』読解」、『文学と評論』第 3 集・第 9 号、2013 年 11 月、pp. 29-43. <査読有>

[学会発表](計 3 件)

1) 「Louise Erdrich: *The Round House* を読む」日本アメリカ文学会中部支部読書会を司会:長畑明利氏で講師:平野順雄、川村亜樹、クマイ恭子、小池理恵氏と読書会を行なった、2017 年 12 月 9 日、愛知大学。

2) 日本英文学会中部支部シンポジウム「地誌 / 地質から読み解くアメリカ詩 ディキンソンからオルソンへ」を、金澤淳子氏の司会兼講師で、江田孝臣、平野順雄の 3 名でシンポジウムを行なった。名古屋工業大学。

3) 平野順雄 「空回りするインタビューとその修正」日本アメリカ文学会中部支部例会、2015 年 6 月 20 日、愛知大学。

[図書](計 2 件)

(1) 『英米文学における父の諸変奏 安田章一郎先生百寿記念論集』英宝社、2016 年 3 月。(共著)鈴木俊次、滝川睦、平林美都子、山口均編。平野順雄「オルソンの文学的『父』、ハーマン・メルヴィル」pp. 326-355,

(2) *Letters for Olson*. New York: Spuyten Duyvil, 2016. Ed. Benjamin Hollander. Hirano, Yorio. "What I See in The Maximus Poems of Charles Olson." pp.133-152.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

平野順雄 (HIRANO, Yorio)

椋山女学園大学・人間関係学部・教授

研究者番号: 00199085